何ということだ。再び車内は喧々囂々。私は狼狼した。歩けって、これ以上どうして歩く。大人は一人、 二人諦めて荷物を頭の上まで積上げつぎつぎと降りた。広い広い佐賀平野の稲田の真中、私たちを拒んだ川が流れている。 地図の勉強が親に似ず大嫌いな私は、その川の存在も名前も知らない。これ以上妹たちを歩かせるのは殺す以上の悪業だと知っている。私たちはじれる心を無理矢理おさえながら出るまで待とうと決心する。車内に我々だけとは余程例外的心臓だと車掌は考えただろう。しかし今度も私たちは見捨てられなかった。程なくの素気ない挨拶の下に汽車は出た。

声は細かったが精一杯の喜びの声だ。

硬直せぬ前に婦長さんが体を整える。その白い細い手に今まで手におえなかった人の体が易々と動かされている不思議さ。私は恐れをなして反対側の妹のベッドへ寄り添った。

家への強烈な不安が、 またも頭にのしかかって来たが、たちまち忙しさにきりきり舞いを始めて、その方に気を奪われてしまった。 つぎつぎと来る人たちで庭も、廊下も、部屋も異様な混雑を来たした。無事なのが恥かしい。意識なく先生に見守られて昏睡せる人、見るも恐しい裂傷の肉の割目、十糎程の腕をじっと眺め入って歯を食いしばっている人、もえる様な熱でバケッにゲッゲッ吐き続けている境さん。やがて北原先生が、山の奥深く埋めておいたカンパンの缶と砂糖缶を持って来て下さる。そうだ、 私たちのお弁当箱は中身もろとも空中に飛び去った。今朝は、 お母さんの横でイリコの佃煮とインゲン豆の煮物を作っておかずに入れたつけ……。

家を出るとき輝一が冗談ともっかずに云うと、 道子は肩を叩いて送り出した。

毎年めぐってくる八月十五日の前後は、道子が新聞も雑誌も見るまいとし、ラジオも聞くまいとする期間であった。彼女こそ、それらの報道を心の底から嫌だと思っている。うっかり流れ出たラジオの声が、原爆について語りだそうものなら、道子は子供が高熱でひきつけたような形相になってしまうのだった。

輝一が云い終ると同時に大きな欠伸をした。ともかく解放されて急に体中の緊張がゆるんだのだ。

私は倒れている夫人の姿が浮んでくるのをふり払おうとそこから眼をそらせた。しかしそこは、映画館の中のそこだけ明るいスクリーンのようだった。さけきれずにまた眼を吸い寄せられてしまう。私は夫人から受けた拒絶的な冷い印象と、 と話していた幸枝おはの言葉を想い出した。

私はかぶってきた汚れた帽子を片手でつよくにぎり、弁当の包を小脇でしめつけて、少年のように胸をはずませながら、 足音をしのばせて石畳を踏んでいった。

植之進が脚を痛めているのは、ある日、 職員会議の中途で、

私は結局、正直に植之進との関係を告げ、死を知らされて大変意外に思ったが、氏について知っていることがあったら教えてもらいたいと話した。

ナイフをつかむと、ずっしりした重みがおらの手にったわり、おじきがいっか話していた三八銃の先につけた銃剣はこのことだったんだな、とおらは思った。こいつで人を殺したんだ、だからおじきはそれを十年間もポケットに入れて持ち歩いていながら、一度もまだ開いたことがないんだ。軍隊からもらってかえったカーキ色のシャツやズボンや水筒やはんごうは、みんな消えてしまったのに、これだけが残り、だから、これはおじきの宝物なんだ。

男はひとりごとをいった。

こんなもんでも腹いっぱい食べられるようになったのはあ

と、おらはじいさんにそっと訊いている。じいさんはなんにも答えず、おらを見ようともしない。じいさんの目には、 燃えている町が映っているのではなく、ひらいた目に、暗い夜のふちと、そのふちを不規則に型どっている遙かな割れ目に血を噴きださせているだけだ。おらも、いつもなら、もうとっくに寝ているころなのに、なぜこんなところに座っているのか、なぜ町が燃えて死人がごろごろしているのか、おっかあはどこへ行ったのか……いっぱいいっぱいわからないことがあるのに、泣くことさえ忘れてしまい、水が飲みたいと思えばひとりで川のそばへ行き、それが駄目ならまたじいさんのところへかえり、おっかあがいないことも、それをじいさんが云おうとしないことも、みんな初めからちゃんとそうなっていて、どう逃がれようもないことのように、おらの小さな頭のなかにみんな受入れているようなんだ。が、心のなかでは、それらは、手に握った飴玉が粘りつくようなおそろしさこべっとり取憑かれて、大きくなってからも決して想い出すまいとするように、 しっかり固い殻のなかに閉込めようとしているふうだった。

……真四角な狭い、あまりにも狭い二・五米立方の一室…… これは病室なのだらうか、隔離された独房なのだらうか。だが、僅は軽く、軽く生きてゆくよりほかはない。軽く、軽く、 夜明けがた僕をつつんでくれた空気の甘いねむり、羽根のやうに柔らかなもの。……誰かが絶えず僕のことを祈ってくれてゐるにちがひない。……僕はぼんやり寝床の中ていつまでも纏らない思考を追ってゐる。

前から僕はこの家の主人に、医者に診てもらへと、そっと注意されてゐた。恐る恐る僕は一度、病院の門を潜った。医者は衰弱してゐることのほかは何も云ってくれなかった。それはむしろ僕を吻とさせた。このやうな恐ろしい飢餓の季節に、文無しの僕がどのやうな養生ができるのか。僕は、疲労しないやうに、疲労しないやうに、と、飢ゑ細ってゆく自分の体をなるべく、ただ静かにしてゐるだけであった。だが、 僕を視るこの家の細君の眼は、!—それは僕がこの家で世話になりだした最初から穏やかではなかったやうだが—。第に棘々しくなってゐた。澱粉類の配給がばったり杜絶えて、 菜っぱと水ばかりで胃の腑を紛らしてゆく日がつづいてゐた。 と、ある日たうとう、この家の細君の癇籟は爆発した。僕は地べたに叩き伏せられた犬のやうな気持がした。宿なしの罪業感が僕を発狂させさうだった。僕は怯えはじめた。ひとりでに僕は、この家の人たちから隔離の状態に置かれた。主人は僕を憐むやうな眼つきで眺めてくれたが、もう遠慮がちに何も語らなかつた。細君は僕と顔を逢はすことを明かに避けてゐた。ただ内側に押し潰されて籠るものが、この家全体の無気味なものが、無言のまま僕をとりかこんだ。そして、これは僕がこの部屋にゐる限り絶えることのない苛責なのだ。 この低い白い脆さうな天井、……僕の寝てゐる頭とすれすれにあるガラス窓、……僕の足とすれすれにある向側の壁、

僕はお前の骨壺を持って郷里に戻ると、その時、兄の家で古いアルバムを見せてもらったことがある。昔の写真のなかから、僕は久し振りに懐しい面影を見つけた。僕が少年の頃、 死別れた姉の写真であった。こんな優しい可愛い娘さんだったのかと、僕はそんな女のひとがこの世に存在してゐたことを不思議に思ひ、僕がその女の弟であったことまで誇らしく思へた。姉は結婚して二年目に死んだのだから、娘さんとは云へないだらうが、僕の目にはあまりに可憐で清楚なものが微笑みかけ、それが柔かく胸を締めつけるやうであった。僕は大切にその面影を眼底に焼きつけておいた。 それから僕はときどき、こんな想像に耽けりだした。もしも死んだお前が遙かな世界を旅してゐるのであるなら、どうか僕の死んだ姉のところを訪ねて行って欲しいと。だが、この祈願は、今ではかなへられてゐるのではないかと思ふ。僕は、眼もとどかない遙かなところで、お前と僕の姉との美しい邂逅を感じることが出来るやうだ。

ガラス壁の側にあるテーブルに白い紙のやうなものが仄かに見える。たしかあそこはいつも僕の食事が置いてある場所なのだ。僕はおそるおそる床板の上を歩いてゆく。匐い寄るやうな気分で、椅子の上に腰を下す。テーブルの上の新聞紙をそっと除けてみると、たしかに何か食べものが置いてある。

このあたりは、かっては蓮田だったが、なん度かの兵学校の拡張によって、なまこべいか先へ先へと走っている。やつと、へいか終わって、兵学校の教官官舎が道端に並び出したあたりで、顔見知りの中年の婦人にぱったり出会った。 息子がことし、私の通っていたのと同じ広島の県立中学に合格したこの島の小学校の教師だが、夫を亡くし、親一人子一人で育てあげ、やっと目標の中学に入ったこの子が、あの日から帰ってこない。

おしろい気のない細表の寂しそうな表情を見ては、こちらから声をかけぬわけにもいかなかった。

それは、消化できずに腹をこわすのではないかと思われるほどの早さだった。もちろん、こちらが手を出すどころてはなかった。

下りで思わず急ぎ足になり、兵学校の門前にやってきた。 先日まで衛兵が銃剣っきの正装で構えていたが、敗戦のいま、 丸腰で所在なけに突つ立っているさまは、戦闘帽も不つりあいで、なんとなく間が抜けてかっこうがつかない。 道もはかどり始めたが、気のせいか氷の溶けるスピードも早まり出したような気がしてきた。

白昼、私の脳裏に幾本もの白い杖か、浮びあかった。白い杖の先は気ぜわしく刻んだ音をたてて、黄色い、狭い道に群かってくる。姉は斜め上の空を指した。ありがとう、と礼を言って、私は姉と別れ、一人でE寺に続く坂道を登って行った。坂の途中に、八百屋があった。 戻って来て、姉が後から肩を叩いた。

その通りなんです、八月九日は建物も人間も大変だったんです、と私は校長の言葉を取って言った。

きぬ子は樫の幹を、手のひらで撫でて、 と目を伏せた。あの一瞬の表情は即死した人間の表情ではない。 なぜ!と問いかける、驚きの表情だった。だから、いまでも誰かに、なぜ?と問いかけながら、何処かで生きている気かする。今日まで墓を訪ねなかったのは、遺体がみっからないまま、死者の仲間に数えられているのではないか。それを聞くのが怖ろしかったのだ、と言った。

九日の夜、長崎に小雨が降った。火傷を負った生徒にとつて、雨はありがたかった。傷と血でほてった体に、しとしとと肌を湿らす雨の冷気は、心地よかった。

少女は申くように口ごもった。手首には痛みを感じないらしかった。隆は再び恐る恐る今度は手を少女の肩にかけ、目を進む方向に向けたまま黙って少女を引いた。少女は足を動かすと同時に、すがりつくように隆の手首を握った。隆は再び走りはじめた。だが彼は、自分が今どうしているのかを意識していなかった。

急に隆が手を引っこめて叫んだ。

隆はいうと同時に、ふッと野外演習の、それこそ足が動かなくなったといっていいほど筋肉が疲れ切ったあとの、突撃ラッパに追われるようにして持ちあげた軽機関銃の重さを、 思い出した。

二人の間に言葉がとぎれる。隆は目をそらした。《大きくなった……》頭の中で、隆は貪るように清子を見た。工場寮へ来る手紙の調子はあまり変りもせず、ところどころ思いかけない箇所でその無邪気な性質を感じさせていたのであったが、

中国地方の山間には、どこにでもあるように、その低い峠の頂上が村境になっており、そこをこちらに下りて来ると、 谷間は少しづつひろがって、いつも収應のわるい小さな山畑や山田がずっと段々になって、部落の平地にまでつづいている。

では、いったいこんな奇妙な風潮は、なにに原因しているかといえは、多くは原爆を落した国の占領政策のためだ。今では世間によく知られているように、広島にできた大がかりな占領軍の病院は元来原子爆弾傷害調査委員会というもので、 傷害の調査が目的であり、生きのこり十万の被爆患者を、治療してくれるところではなかった。占領軍は原爆病さわぎが大きくならないように、できるかぎりの弾圧政策をとり、原爆後五年ほど経っと、アメリカ政府は、とぬけぬけと発表したものだった。この発表がいかに噓ッぱっちのナンセンスであるかは、今日になっても、日本人が五日に一人ずつ原爆病で死んで行く事実がまことによく証明しているのだ。っまりあの当時、占領軍や日本政府が、被爆者の検診や治療に、 きわめて冷淡だったせいで、三十万の被爆者たちは、仕方なくそのまま野放し状態で、全国に散らばってしまつた。今となっては治療も手遅れで、なんともとりかえしょうがないのである。

それ以来二十数年、 あの朝のピカドンて、家族も家財もすベて失い、おまけに生まれもっかぬかたわにされて、びっこの脚をひきずりながら、やっと故郷に辿りつき、地下の片隅の磁藍にどうにか住まわせてもらうことになったのである。 万助が、隣村の仕事先から帰り道に、峠下の山道で、 柔道五段とやらの、 あの松田屋の先生らしい畑荒しの姿を見た翌晩、

しかし、その晩最終のバスか、 地下を上っても、なかなかおクメが家に帰らないので、彼女の亭主が、万助の灰屋に来てみたことからひと騒動になった。ひよっとしたら、梅ガ谷の淵に身を投げたか山の中で首を縊ったか、どちらかではないかということで、近所のものたちも、夜更けまで探したが、 なにぶん夜分のことでよく探せず、捜索を翌日に持ちこした。 すると翌朝、彼女の嫁入先沖野屋の裏の山で、おクメの死体が、樫の枝にぶらさがっているのを、簡単に発見したのだった。

しかし、何故、これをわたしに言うのか。

吉備彦は、別してこのケールレル博士像が好きだったというわけではない。もちろん教養学科の学生である彼と、何の縁もゆかりもありはしない。十九世紀ドイツ北部連邦陸軍上等軍医正であった偉大なる博士は、植の穂先のようなものの突出した兜をかぶり、両肩の肩章からはモールが下っていて鉄十字章その他六個の勲章を吊るすという物々しい出立ちであった。

日本へ?!日本での予定その他のことについては、彼が直接に知っている唯一の日本人である出音也教授に一応はまかせてあり、彼のこ、と、については秘密を保つ約朿はしてあったが、しかしいまの世のなかでどんな秘密が保たれるものであろうか。精神病院のなかでさえ秘密は保たれがたかった。ときどきは、彼自身でさえが外部からの襲撃を避けて、鍵からの自由を宣言した病院で鍵を要求しなければならなかった。 あけはなしのドアーから、銅鑼の音が鳴りひびいて來る。 昼食なのだ。外部の世界が彼を呼んでいるのだ。

と問うと、

なぐりすえられた私が、毛布をかぶって.ヘッドにすくんでいると、一人の男が足音を盗んで近寄ってきて、なにやら私にささやいた。私が、顔を上げると、出目金のような顔をした男は、 ネ、といった顔をして、それから、 唇に指をあてて、シッ、と言った。すると、 彼の.ヘッドの隣りから、言葉にならない、ものすごい唸り声が聞えた。彼は、また唇に指をあててみせ、彼のベッドに戻ってゆき、唸っている隣りの男に、ひそひそ、ひそひそ、なにか説明していた。

私は、思わず、ぼろぼろの前を手で隠した。それがおかしい、というので、一同はまた哄笑した。ラッシーとよばれた仔犬が、これは自分の手柄なのだぞ、と誇張して、喉を一人前にのけぞらせて吠え、私が眼を向けると、幼い牙をむきだして、威嚇するのだった。

歯を出した彼は、私からの返事をことづかりたいらしく、 私が封を切って読んでいる間じゅう、忠実に立っていた。 —私たちは生きています。あなたはきっと信じないでしょうが。

歩き疲れた脚は、そうやって落ちつくと、しばらくはぶるぶるとふるえていた。歯のふるえはやっと止まったものの、 悪感が体中を這いずりまわりはじめ、高い熱が出ているらしかった。眠ったら落ちるな、私は、ここからはかなりある也面を覗きこみながら、考えた。もう一度登れ、と言われたら、とても登れる体力は残っていなかったな、私はずきずきする頭の片隅でそんなことを考えた。莨がほしかった。ここで一夜あかして、また河の方に偵察に行く以外にないぞ。とくに、この乞食よりもひどくなった態では、川遊びの帰りにみせかける以外には、いよいよ、どんな村外れでも歩けっこなかった。けたたましくつんざく鳴き声とともに、突如として黒い鳥がはばたいたり、キッキッと金属をこするような音を立てて、黒い小さな獣らしいものが走りぬけたりしたが、 それがかえって前の静寂をいっそう黒く、いっそう深いものにした。雨上り後の爽やかな夜気に滲透された沈黙の森に向って、私はひとり、古ぼけた幼い口笛を吹いてみた。眠気と夜の恐怖を追い払うために。森の夜は、やはり怖かった。私は三銃士をひきいて森遊びした悪童時代にかえって、 〈老いたる黒人ジョー〉の単純なメロディーを繰り返し吹いた。……私が若く元気であった日は過ぎた。……わが友らもみな棉畑から去った。……その口笛は、星にまで届くように、倍音を伴って' 鬱蒼たる楠の梢にまでのぼってゆき、私の熱のある体を透明なものにしてくれた。〈この地から去ってより善き国へ。私は、わが友らがやさしくやさしく呼ぶ声を聞くオールド・ブラック・ジョーと呼んでいる声を。〉 森の周辺に近い方で、照明弾が上った。それは、 たまゆらの間、思いがけない鮮明な多彩な緑に、森をカッと照らしだしたが、ゆうゆうと尾をひいて次第にはかなくなってゆき、 沈黙したまま答えようとしない、闇の森にまた呑みこまれていった。私は、口笛の音を小さく低くし、歯と歯の間でかすらせながら、もう一度、〈オールド・ブラック・ジョー〉を繰り返した。奇妙なことに、私は、その私を捜索している照明弾がなつかしかったのだ。

浩は、やはり、おばあさんの考えが第一だと言って、その夜、たつに尋ねた。

まあ、死んだ人は死んだ人。もはやいくら考えてみても戻って来るはずもない。一区切りがついたからは、 今度は生きた人間のことを考えなければ……。初代は、夏休みで、家に居ることの多い浩を見ながらそう思い思いしていた。春子は五年前に嫁にやって、もう子どもが二人もいる。姑のたつは七十を越したが、まだまだ一人暮らしの音を上げそうにない。 初代自身は、小学校の小使室勤めを始めて十年余りになるが、 まだ弱音を吐くとしでもない。いきおい、初代の思いは、浩の上に落ちるのである。

案に相違して、浩は驚かなかった。

浩は、そう言うと、階段をきしませて二階へ上がっていった。

艦載機の空襲が一周波終ってから二階にあがってみると、 真向いの山蔭から黒煙が立ちのぼっている。そこら辺りに飛行機がある筈だった。明日また来てみるとのことであったが、 その日一日中曾宮少尉からはなんの音沙汰もなく、不安のままに遽しく昏れてしまった。基地まで行けばと思うものの、 ガソリン・タンクに引火したのか夜に入ってますます激烈な火の手をあげて燃え熾る飛行場には、恐ろしくて近寄れもしなかった。あたしは出窓に腰掛けて、茫然と火災の焰を見まもるばかりだった。

と、はじめて応召前の兄らしい声だった。

無理もない。入隊以来もう二年越し会ってないからなあ。

家に近いいつもの電車停留所のアカシャの鋪道を、あたしは二度三度往き戻りして電車を待つ風情を装った。原爆で立ち枯れたかと思われた広島のアカシャや鈴懸やプラタナスの街路樹も、今年の夏には一せいに芽を吹いて、青々とした葉も微風にそよかせている。その日影に立って、あたしはぼんやり手に持ったパラソルを廻していた。

どういうところ、と私がきくと と答えて、背丈の低い方の学生は手の甲で唇を拭いた。

私は何をすればいい。私の耳奥にふたたび低い波のような声がきこえてくる。

おかしいよ、そんないい方。僕が残っているのは、八月六日の広島だけでなく、もうひとつの広島を知りたいからだ。 もうひとつの広島?

しかし一方、このままの状態ではどうにもならないと叫ぶ被爆者の声が次第にひろがりつっあることも事実だ。二十年間の絶望と分裂抗争の愚かさを土台にして、もう他人にはまかせておけないという苛だちこそが、この一年間にあらわれたひとつのカともしえようカ。

と、その大きなふくらみを見て、

と、手を小さく上げて挨拶し、学校の石塀にそって左へ曲り、足早に去った。彼の影が忙しそうに動いた。 連れの男に行かれてしまい、張りつめていた気持が緩むと、 両肩にひどい疲れを覚えた。そして、彼と二人で動き廻った一日が一巻の滑稽な漫画映画に見えた。あの男も僕も、まったく調子が狂っていたのだった。こみ上げてくるおかしさに抗しきれず、僕は、道の真中に突つ立ったまま、声をあげて笑った。不思議に、大きな不安はなかった。朝が来れば、まず勤めている小学校へ行って、生徒たちが無事であることを確かめ、その足でミツの実家へ廻ってみよう。ミッは、まだ生み落さぬ大きな腹を撫でながら、柏子抜けのする笑い方をするだろう。

そう云うと、彼は奇妙な声で笑った。

修造がいった。

かわった装飾があるのでもなく、知人がいるというのでもない。はじめてやってきたこの街でいて、ありふれた室の光景にすぎなかった。

かれはそれを強く前へ押しだすことてなにかをかくしうるような錯覚を意識する。いつまでと期限があるのでもない、 だから不確かなはなしはあった。しかしその短いテレビドラマの脚本のために、こんな街へまで来る必要はなかった。資料の瞥見なら図書館で足りる筈だし、資料あつめなどもともとかれの好まないやりかただった。

たったそれだけの時間のうちにうけた不快な印象を美那子につげた哲夫の、その過敏な神経がうっとうしい気はする。 それも要するに、気のもちょうだと思えば済むことだった。 パラソルをかざした女と若い男をのせたボートが流れてきた。男はオールを休め、水に手をひたしている。やがてパラソルがゆらぎ、女も男にみならうようだった。でも、女の水にひたした手は、こちらからはみえない。 ボートはそのままたゆたい、岸辺にいた子供たちは石段に腰かけて、バケツのなかを覗きあっていた。

河井あきは格子縞の裳の多いスカートに、白と茶のコンビになったサドル・シューズを穿いて、浮き浮きした足どりで階段を下りて来た。受付けに一葉の名刺があった。学芸部記者と肩書のあるその名刺には見覚えがある。河井あきは外人のするように、大きな表情で愕きをつくってみせた。この春、 彼女は夕刊に写真入りで紹介されたことがある。それは、職場の女性に取材した、夕刊むきの連載記事であったが、A ・ B・C・Сという特殊な職場に着眼して梶がカメラ・マンを同伴て訪ねて来たものであった。このことは平凡な彼女を俄かに有名にさせた梶に彼女を紹介して呉れたのは加木昭平である。河井あきは加木昭平を捨てていた。長い間、加木昭スつば平という一人の男だけを嘖めていたということが、ひどく莫からしく園えたほど、その夕刊への登場は彼女に男たちの違った視線を覚えさせた。河井あきは自信に溢れはじめた。新聞への愕きは、いまや憧憬に近い。ジョージ・松田の求婚は、 この記事がきっかけのように思えた。彼は六月一日付の辞令で、彼女を自分の秘書に据えた。月給は倍になっていた。夏の海辺は燃えている。そして夜の浜辺は妖しく燃え、疼いた。 秋。河井あきの指にはー・五カラットのダイヤが燦然とした。このダイヤには凡てが賭けられている、と思った。このダイヤの輝きはあの男がカメラ・マンと共に訪れて来た時に約束されたのかも知れない。

———梶はじいっと眼を瞑っていた。迫ってくる年の瀬にも何の感動もない。だが、正体のわからない何ものか、その莫然とした不安がひたひたと彼の足許に迫って来ているのだけは、いなめないのだった。眼を瞑っていると、街の騒音にまじって肩といわず頸といわず、のしかかり抑えつけてくるような重い倦怠に似た実感があった。

ジョージ・松田は計算していた。ストライキの人々の悪口を云うことは、まずい。反感を持たれるし、二世という俺の立場も恨まれるだろう。新聞記者は煽てておくに限るのだ。 ペンは剣より、強しか。無官の帝王たちは、好意を持った人間に恩賞を、悪感を覚えた人間たちに必罰を下す。先ず好感を持たれることだ。彼は日本人たちの味方だ。そうして、横暴な白人との間にあって苦悩している憐れな二世だ。だが、 ここの白人たちは決して悪い人間たちじゃアない。原爆をっくる人間ではない。彼等は被害者を救うために、二度とこんな惨禍を起させまいと努力している、平和な科学者たちだ。 A ・ B ・ C ・ Сは診察はするが治療をしない、という噂は知っている。しかし、ア算の関係てどうにも仕様がないのだ。 近い将来に、新しい治療の手をさしのべる意向である。ただ莫然と治療、治療といったところで、現在のところその薬もないのだ。その薬は、А ・ B ・ C ・ Сがーー千日という時間をかけて調査した、その結果から生れるのだ。ここの白人たちは戦いを好む軍人たちではない。また軍事的な支配下にある建物でもない。みんな、善良な紳士なのだ。だが、この建物の中では、わたしたちは使用されている人間にすぎない。不平もあり、不満もある。こんどのストライキだって、私は胸をいためている。白人たちに強い態度で出れないのは、彼等が無理矢理、首を切りたがっているのではないという真相を知っているからだ。過剰な人間がいるのは事実なのだ。より少い人間で、最大な研究成果をあげることこそ望ましい。ひとりの健康な人間が路頭に迷うより、五人の病める不幸な人間たちに明日の希望を与えたい。それには首切りも止むを得ないのではなかろうか。それは科学者としての真実な希いであり、他のなにものもない。或る白人は私に眩いた。俺は今、 金が欲しい。金さえあれば、治療の手をさしのべられるし、 また、可愛いい我々の友人の首を切らなくても済む、と。…… ジョージ・松田は計算通りの,-言葉を綴って語り終った。雄弁であった。彼は大きなゼスチュアーで、白人の善良さを語り、日本人への同情を述べる。そして、この二世の己れの苦悩を訴える。ときどきメモの手をとめて、梶はこの二世だという男の不思議な感動ぶりを眼をあげて注視した。いやな声音と表情であった。鼻音化された日本語は、妙な抑揚で伝わって来るのだった。素人の翻訳劇のような、その言葉。本人は自分ひとりで感動してるらしいが。死んでいるような言葉。 まるで台詞を棒読みにしている役者を思わせるのだ。悩んでいる、という。悩むという言葉を愉しんでいるような。 そんなことを考えながら、それでも梶はいちいち合鎚をうちながら、熱心に頷いている自分に気づく。うらはらな、かなしい習性。新聞記者稼業がいかにも板についたようであった。頷くという行為は、相手に同意することではないかも知れぬ。だが、それは瞬昧な虚偽のポーズであるような気がした。かすかな苦痛があった。頷くことの苦渋。そんな、うらはらな感情に最近よく虜われているような気もして、梶は相手が話し終ってからもしばらく、ぼんやりしていた。そうして、相手の言葉に耳を傾けていたように装いながら、一度、 二度強く頷き返してみせる梶であった。頷きながら軽い自己嫌悪が、ひたひたと押し寄せて来るのに気づかねばならなかったけれど。星はなぜか、ふッとジョージ・松田に憎しみを覓え・二。その憎しみがどういう性質のものかは、 突嗟には見当つかなかった。

カメラマンは床に膝をついたり、あきの躰近くに顔を寄せたり、せわしく動き廻っていた。この新聞記者は鉛を被ったように冷く硬はらせた顔を窓に向けていたつけ。カメラ・マンの動作が気に喰わないのか、ひどくいらいらと怯える表情だった。水銀をのんだように嘎れたカメラ・マンの低い声は、 わたしだっていらいらした。縮れつ毛の、あばた面の、ちんちくりんの小男が、私の周囲を行ったり来たり、立ち止ったり、跼んだり、カメラを構えたり、した。ひどく長い時間のようだったけれど、四、五分とはかからなかった。だがその時この人物は苦痛に耐えるような、恐ろしい形相をつくって窓に向いていたのだ。ポーズをとりながら、その横顔は私を気がかりにした。,・お嬢さん、ちょっと誰かに話しかけてみて下さい。カメラ・マンは胸のあたりに構えた写真機で、 窓際の記者を示した。あきが、梶に話しかけ、それに答えて梶が向きなおった時、青白い閃光が室一ぱいにひらめき散った。どうしたというのだろう。その時、その男は唇を顫わせて、棒立ちになった。愕きと怒りの錯綜したような、あおざめたかお。躰のすみずみから蒼褪めた苦痛が滲みでていた。 どうしたのだろう。この記者はしばらく突立っていて、次の瞬間、蹣跚くように壁に凭れかかっていたのだった。 河井あきは静かに含み笑った。そのときの光景は不思議な、 でも第三者の眼からは失笑を禁じ得ない醜態でもあったから。 含み笑いながら、河井あきは梶の坐っているソファーの横に佇んだ。受付にいる看護婦たちの視線を感じながら。ジャーナリストと親しいということか、さも誇りててもあるかのように。梶はぼんやりと視線を向けた。女は微笑っていた。愕いたように立ち上りながら、彼は眼を瞬いた。たしか、見覚えのある。———梶は忘れていた。———その節は、どうもいろいろと。河井あきは微笑を絶やさない。梶はフラッシュの凄まじい閃光と一緒に、河井あきの名も思い出していた。いやなものを思い出したな。梶はちょっと顔を歪め、すぐ笑顔をっくり出すのだった。笑いながら、きゅっきゅっと眼球の深部が痛むような気がした。あれは、たしか木塚カメラ・マンの悪戯だった。あいつは、 俺がフラッシュの、 マグネシュ— ム性の閃光を嫌うことを知っている。俺が臆病者だと陰口を利いている。あの小男。小学校しか出ていないあの男は、 新聞社の給仕から叩き上げた生粋の技術屋だった。あのカメラ・マンは大学出の若い記者を軽蔑していた。劣等感があるのだろう。いんふえりおりてい・こむぶれつくす。たしか、あの時は木塚カメラ・マンの悪意に満ちた仕業であった。そうとしか思えない。

左官町の長男はすでに召集されていたが、次男は修道中学から陸軍士官学校に入っていた。相ついで戦争に馳せていく身近な人びとに、ひとしお深く愛惜の念を抱いた。 中国地方随一の大都市広島を、なぜ敵が見すごしているのか、市民も不思議に思っていた。といって空襲警報は、毎夜のように出ていたが、いつも上空を素通りして日本海に抜け、 機雷を投下するという決まったコースをとっていた。 七月の何日だったか、呉が敵の艦載機の波状攻撃をうけて壊滅したときは、さすがに肝の冷える思いをした。広島にいても、腹の底をゆさぶるような爆発音が聞こえ、わたしは防空壕の中で怯えていたが、いよいよ次は広島の番だと観念したような気持ちになった。

日赤病院、大学の前を過ぎた。妹は無事学校に避難しているに違いない。わたしはそこに気づかなかった。先生に引率されているのだ。勝手なことはできない。学校へ行けば会える。幸橋はもうすぐそこだ———わたしは急に元気を取り戻した。

当然防空壕に避難していただろうし、もっとましな防衛手段があっただろうと思う。そりや、原爆だから、空襲警報が発令されていたからといって、何の役にも立ちはしないだろうけれども、わざわざ『五千万度』という灼熱に顔を突き出すようなことはなかったと確信する。

あとかきこの本は安田武氏、 また中国新聞社の平岡敬、 大牟田稔両氏の三年前の強い勧めによって生まれた。間接には原爆犠牲者と亡母金井時子の無言の励ましを感じながら書き続けた。母は若い時代に武者小路実篤先生のの弟子となり、広島県三次市で広島の被爆避難者の介抱も手伝った。

文中の私見は、頭の柔軟体操ふうの要素が多く、強烈な見解というよりも、問題の列挙と受けとっていただきたい。巻末付録は、広島での被爆地図復元運動などの"草の根"的な活動の展開に教えられるまえの、私の記念の一文である。

本書の原稿を書き終えたのちも、広島では“草の根"的な運動がいろいろと進んでいる。被爆地図復元運動をはじめ、原爆被災記録映画の増補編の製作企画も、広島市がその (山本正房会長)を中心に呼びかけて進められている。さきのコロンビア大学の十五分に圧縮した記録映画には被爆生存者の現状は紹介されず、過去の記録に止まるので、現況を含めたものをとのことだ。私は広島で人間というものを教えられてきた。広島市民はその意味で私の恩人である。

勤務先の学校が夏休暇になると、妻とひとり息子をつれてこの街ですごしていた。多くの人が軽井沢などの避暑地へ行くのが私にはまだ理解できない。私が東京をのがれるのは、 暑さを避けるのではなくて、暑さをえらぶのであった。私にとって夏は、ほんとの夏らしい夏を生きることであった。 夕なぎの息苦しいまでの熱気の無風状態、激しい太陽の光がみなぎる昼間、私はじっと机に向って耐えた。いや、耐えなければならぬ、と決意してきたのだ。しかし、この半年ばかり尊麻疹の症状がつづいていた。夏に向うにつれて悪化しているように思えたが、私は病院へ行くのを拒んでいた。医者の診断を避けているのかもしれなかった。私は病院より図書館をえらんだ。冷房装置がある新築の県立図書館へ通うようになった自分を、夏の敗北者だと考えだし、この圧しつぶされた敗北感からは、にがい意識がしたたり落ちるのであった。

私は〈紀要〉に発表する論文を書きあげる予定であった。 私の卒業論文は、古代葬制と殯宮挽歌との関連についてであったが、こうしたテーマを選んだのも、私はどうも葬儀に興味をいだいているらしい。死が根源的な意味をもつためには、 儀礼が必要なのではないのか。つまり、死は祭祀によって初めて表現をもつのだ。喪に籠る殯宮の儀式がなかったら、あの萬葉集中の人麻呂の日並皇太子尊をはじめとする殯宮のための秀れた挽歌はっくられなかったであろう。 〈紀要〉の論文は、『浦島子考』という題名にするっもりであった。浦島子のことが日本書紀、萬葉集、丹後国風土記に記録されているのは、いかに古くから伝承されたかを証しだてている。わが国で最も古いこれらの書巻の浦島子は、私たちが知っている浦島太郎の話とはかなり違う。亀を助ける動物報恩譚の要素はない。日本霊異記にとあり、備後の三谷の郡の大領の先祖としてはじまるのだが、備後国三谷郡は現在の広島県双三郡である。これが十三世紀の宇治拾遺物語になるととなって主人公は天笠の人となる。 萬葉集巻第九にある、詠水江浦島子の長歌並びに短歌と、 日本書紀、風土記とでもかなり違う。

花崗岩質の流砂によって造られた地表は、夏の光をまぶしく反射させ、積乱雲は透きとおる空にくっきり白線をひいてそそり立っているのが眺められた。午後になると時おり稲妻が雲層を引き裂いて走るが、響きわたる雷鳴は聞えない。こうした状態が持続しはじめると、急に私は鋭い不安感に襲われ、目まいを感じた。窓際に走り寄って、確実にとどろき渡っている雷鳴を自分の耳でたしかめたかった。何事も起らない平静な中にいる私が爪で窓硝子を引き搔いているような、 すべすべした空しい存在に思われるのだった。ひたいにガラスの冷たい感触をおぼえ、あらためて私は熱い塊りを内部に意識する。

く、もう垣もとりはらわれて、板や壁が散乱しているだけであった。その辺りを見まわしたが記憶にのこっているものはなに一つない。わたしは腕組みをしてたたずんでいた。

こともなげな女の返答である。その女の言葉の中に、昌造は楽観的な部分だけを無埋に見つけようとした。助かったものは殆どないが、少しはある、そう受け取った。昌造の干でしめった下着が、腹の肌に冷くはりつき、やがて生温くなって行った。女は自分の返答が相手に与えた反応など全く放念しきった眼つきで、ふらふら歩いている。二人は、曾っての市電の停留所稲佐橋通りをかなり過ぎていた。汽車の線路沿いに歩いていた。一直線に延びる汽車の線路の前方に小さい人だかりが見えている。ここからの距離からみて、昌造には、 ふと、その人だかりが、デッキから転落した男と関係があるように思われた。

女は、片手に薄い髪を束ねてみせ、その手を力なく落した。 女の顔に微かに媚びるようなものが浮んだのを昌造は見た。 自分の中に死の影を見た女には、急に、傍らの男の幸福が羨まれた。不幸な者の心は、しばしば、幸福な者を僧むよりは敬うものであるらしい。処が、昌造は、逆に、女に死を嗅いで、徐々に女をうとましく感じ始めていた。昌造も自分が不幸だと思っていたからである。不幸な昌造の心は、自分より不幸な女を愍むよりは、女が自分より不幸てある、ただそれだけの理由で、女をなにか悪者のように看做していた。と言って、女の幸福を望んでいたわけでもなかった。昌造のこの時の感情からすれば、幸福者か不幸者かは生れた時から定められていなければならなかった。そうして、自分はいかに不幸になっても幸福人種の限界内での不幸であると思いたかった。昌造が女を悪者のように思いなしたのもこういう感情的に無理な努力を女の不幸な存在が彼に強いたからである。原子爆弾を体験せぬ昌造の心には、〈自分に限って〉という、自分が世界の中心であるかのようなあの感覚か根強くあったのだ。一方女は、その〈自分に限って〉を、とっくの昔に放棄していたからこそ、自分より幸福な昌造を素直に羡むことができたのである。

と女を促した。女は黙って随いてきた。二人は、道に出た。

一本足で立つだけの白い御影石造りの鳥居が遠く瓦礫の波の彼方に見えた時だった。突然、男は眼を醒ました。鈍い眼差を眩しげに昌造に向け、それから外を見た。少しの間、男は、怠惰な姿勢で無表情に外景を眺める様子だった。と男の眼は烈しく瞬いた。弾かれたように首を起し、中腰になった。

年賀状を交換するだけの間柄になっていた旧友の刈田に私が手紙を書く気になったのはその日のうちだった。急ぐべき特別の用件はなく、ただ中学の同級生の消息が尋ねられた。 折り返しきた返事にはとあって十人ばかりの名前と職業と住所が列記してあった。は てあった。

稲垣は気を付けをしてみせた。

お茶が出された。戦前の新婚家庭でよく見られた小さな丸いちゃぶ台の上に、線香立てと同じ湯呑が静かに置かれた。 茶托はなかった。お茶は白湯に近かった。座布団もなかった。 私は黙って啜った。

稲垣は続けた。「『強情な人で、痛いと言わないんです。怺えているのがわかって、手当を頼むと、こんどは鎮痛剤の注射をいやかるんです』———そしてまた話者は私をすかすように見つめた。私は明らかに何らかの判断を求められていた。だがまだその段階ではなかった。私はもう頷きもしなかった。

強別に彼を誘っている。一人になった私は倍になってゆく重さで疲れていた。彼の言うとおり一人の病人を見舞うだけては、全然解決などありはしない。偶然知人てあったことか、私の行為を踏み切らせたのだが、見舞うだけでは全く仕様かない。だからと言って私に何がてきるだろう。あの病人には確実に死が訪れる。そして狭い家に残された病身のあの奥さんはどうなるのか。私は一つの行為の持続か偽善になってゆくようて怖かった。

供養、

千羽鶴の像の前の人ごみから紺色のシャッが歩いてくる。 確かに彼だった。日差しを手をかざしてさけながら私の前の人の流れに巻きこまれていった。声をかけようとしたが、少し前にのめりがちに足早に歩いていく彼は思念を内に向けているのか、声をかけさせない冷たい拒否の姿だった。 一人一人がつながってゆかない気配を濃厚にただよわせながら、それでも水鉢の周囲を群れになって泳ぐ、休むことのないめだかだった。立ち去りかねる人々の群れに、四方からなお加わってくる人々。

起きあがる気力も欠いていて、寝たまま迎えいれた辛さはいつまでも私の底に残った。だが結果的には私の病気が彼を私のもとに運んできたのだった。

こうして、その日の夕刻、どうやら安芸津町の酒匂の家に辿りついた。

言葉は筆谷の気後れた心を、ぐさっと刺した。すごい長崎、 を筆谷は知らない。とでも云われた気がした。筆谷が諸藤家を訪問したのは、 弟英雄のお悔みのためよりも、村越の消息を知りたい一心であることを、ちゃんと知っている顔だった。 筆谷は弁解でもするようにと、まるで歌いあげる調子で繰り返していた。

それは確かに平和な時代の穏やかな声だった。つい先日まで、アナウンサーの切迫した声につづいて、空襲警報のブザ —が鳴り、やがて南から西から、B29の爆音が群がり寄っていたのに、その空襲はぱったりなくなった。月末に米軍が上陸する噂が流れていた。いずれ軍政はしかれるだろう。男は皆殺しか、 去勢され、強制労働だろうとヒソヒソささやかれていた。神奈川あたりで婦女子は山へ避難を始めたらしい。 新聞は連日、占領軍兵士に対する接し方について記事を書いた。とかなどの見出しを見て、意味することの露骨さにふと気付くのだった。この国にかってない事態が起ろうとしている。

戦争は人間を破壊し、無数の死を地上にバラ撒いた。ある日、死が戸口から配達されると、家族たちは黒い異形のものの周囲に寄り集い、悲しみあう。異形は凝縮した実体であったり、家じゆうに拡散して、光りを奪う暗い空気であったりする。

月の白いあかりが友田の今出て行った出入口いっぱいにさし込んでいる。私は起きた。体がたまらなくだるい。私は間もなく髪の毛か抜けはじめるのてはないかと云う気がする。 私は掌の中に唾液を吐いた。そして急いて戸口まで行き、 月の光にその掌をひろげてみた。

女たらし、というのが意外に多かった。また女の方もらしい。男が少ないので女はかつえている。これが女をものにした後での男の方のらしかった。それは自棄だったのだろう。絶望という方に近い心細さだったのかも知れぬ。

と私はまた呼ぼうとして止めた。藪の影の中に人がいるのを見たからだった。

私は自分の顔の前でちよつと拳を振ってみせた。

二:四番地?」

私どもと同じやうに広島だけても三十万人一ぺんの原子爆弾て亡くなりました。今度の戦争で日本は二百万の人命が失はれました。世界中の失はれた人の数は恐怖すべき数字てす。 何故戦争があるのでせう。戦争の好きな人たちの為に戦争で利益を得る少数の人達のために、善男善女、まして幼ない無垢な生命が殺されてゆくのはどうしてもくたまりませぬ。 平和な人たちの美しい世界は、人間界にはのぞみ難いものなのでごさいませうか。

父と様の御命日と同じ日なのでおまつりも一緒にして居ります。可愛がって戴いたおぢいさまの御膝の上であのほがらかな歌をうたっておぢいさまをよろこはせてあげてるのではないでせうか。

なんて云ふのて、

その男だけは、ちよつと別な行動をした。すぐ横町へ曲がりこんだので、そのうしろ姿をなにげなく見送っていると、 その男はゆっくりとした足どり,て停車の位置からだんだん遠ざかっていく。そういえば、彼の身ごしらえからして、いつぷう変わっているように思える。見たところ三十弋のはじめの、やせて背の高い、いかにも徴兵のこりの病身みたいに顔色のさえない男だったが、本物らしいパナマ帽の古ぼけたのを頭にのせ、水色の半袖シャッに、紺色のズボン、それに白いズックの運動靴という、まるて平時そのままの、気楽すぎる外出姿てある。ゲートルなして、防空すきんらしいものも身につけていない。

……はじめの、ひどくぼんやりした意識は、どこか喑いところに自分がひそんでいるかんじだった。けっして広い場所ではなくて、なにか厚い壁のようなもので、ひとつの窓もなく、きゅうくつに閉じこめられている感じ……それにしても、自分は長いあいだ意識を失っていて、いまやっと、われに返ることができたとでもいうのだろうか、と彼は思った。 いったい、これはどういうことになっているのか? おかしな夢でも見ているのだろうか? どうも、そんなことはなさそうだった。頭はどんより濁っているみたいに手ごたえがなくて、これではまともなことなど考えられそうにもない。とても長いあいだ、それも二度と目のさめることのない眠りについていたような気がするのだが、いま自分ほ周囲の暗さをほんのり意識しながら、その謎を自分なりに解いてみようとしている。どうもへんなのだ。まったく、どうかしているではないか。……あの瞬間の、不意打ちの衝撃だけは、いまもおぼろな記憶にのこっている。至近距離から、あのものすごいやつにやられたら、とても生きかえれるはずはないじゃないか。そうだ、あのとき自分はたしかに死んだのだ。それなのに、いま自分はぼんやり感じることができる。すると、あのとき完全には死にきれなくて、なにか意識のかけらみたいなものが、まだ地上に残っている証拠じゃないか。自分の指先で直接にふれてみて、自分の存在を確かめることさえできたら、ひと安心というものだろうが、そんな簡単なことが、どうしたわけか不可能ときている。すると、自分ではどうしょうもないらしいのだから、けっきよく、あわてたりしないで、 このひどく奇妙な気分のする、おさまりのつかない状態を自分はそのまま肯定して、それに早く慣れてしまうより手がないみたいじゃないか……

ひんやりと心地よい夜気に身をまかせ、きまぐれな方向へ舞いあがって、ふんわりと宙に漂っている気分は、せめてもの彼のなぐさめといえそうだつた。いまはもうかなり練習をっみ重ねて、自信もついているので、めったに戸まどいすることもなく前後左右、そして上下に渦を巻くような、複雑な組み合わせの行動も思いどおりの自在さでやれるようになっている。その気になりさえしたら、ある程度は自分で飛行のスピードをあげてみたり、その反対に変化をつけて調節したりすることも容易にできる。現在のところ、ほかになんにもする仕事がないときているから、だれも友だちのいない子供のする、ひとり遊びのさびしさみたいなものに似ていた。すこしずつ場所を変えてみたりしているうちに、いつの間にか行動する範囲もひろがっていく。

それからのち、自分にとってはもっと大きな意味のある発見を彼はするようになる。それは雨もよいの、月も星も見えない、まっくら闇の夜ふけのことだったが、そのときは風さえもぴたりと吹きやんで、へんになまあたたかい空気がしっとりと濃くよどんでいた。その夜もなんの目的なしに、きまぐれな高さをひとりさびしい思いで脊性的に浮遊しつづけていると、ふと彼はなにかのひょうしに、一種のじつに微妙な気配みたいなものをかすかに感じとったような気がした。いったい、それがどのようなものであるのか、彼にはまったく見当さえもつかない。前にもそれと似ているような、なにか予感めいた体験をしながら、そのまま見すごしたことがあったように思い出されて、今度こそひどく緊張して、じいっと聴き入ってみる。だが、べつに微弱な音波によるサインでもなさそうなのだ……それと見えはしないのだが、その微妙な気配のようなものは自分と同じように、どうやら空中のどこかを浮遊しているらしくて、しかも、一つ、二つではなくて、 ふわりと近よりあったり、また離れていったりしているような予感がする。一心に視力をこらしていると気のせいばかりでなく、ぼおっと青白さをふくんでいると思える微光のかたまりらしいものが点々と宙に漂っているのが、やっと見わけられる。……すると、もしかしたら、あれらも自分の同類ではあるまいか? どうも、そんな気がする。そうだとしたら、 あのとき安らかに死にきれなかった、おそらく名前もない霊魂たちの仲間が、自分のほかにもこんなに多く存在していることになるではないか。そう信じこみたい心で見つめていると、こみあげる親しみと、よろこびに似た感情が身うちをあたたかく満たしはじめる。そうなのだ、そう考えていたほど自分はひとりぼっちでもなかったのだ:：： このことをまったく予感もしないわけではなかったくせに、 いつも自分だけの孤独の意識におぼれきって、ほかの霊たちの存在を想定してみる努力を怠けてきた。自分の感覚ときたら、まだまだ幼稚で、すくなくとも未熟で、不確定なものだったのだ。それだからこそ、彼らの近くを飛びすぎることがあっても、星明りの微光とてもうっかり思いあやまってきたのだろう。しかし、これからは同類の仲間がいる!この自分の場合と同じように、彼らの死を心から嘆き悲しんで、いつまでも忘れずに愛惜の思い出を胸のなかにいだきつづけてくれる相手を生者の世界にひとりも持たない、あれらの見捨てられた、心さびしい霊たちが生きのこっているかぎりは彼はスピードを速めて、あれらの微光のかたまりの方へいそいそとはずむ思いで近づいていく。いまは気のせいではなくて、ぼおっと青白い微光の浮遊しているのを、たしかに彼はそれと認めることが..てきる。スピードをゆるめて、たえず相手の存在を意識しながら、その身近なところを飛びすぎてみる。すると、かすかに反応らしいものがあったような気がする。こんどは、そのつぎの微光が自分へ親しみのサインを送っているかのように思えてくる。うれしい気分で、彼はまた飛びつづけた。思いのままに方向をかえ、上昇し、また反転して下降したりしながら、まるで有頂天のあまりに気の狂った、一匹のこうもりみたいに、彼は疲れきってしまうまで闇夜の広い空間をさまざまに飛びつづける……あれらの性別も、年令もわからない、おそらく自分とおなじように、めいめい名前さえも持っていない霊たちも自分と同じ程度に、こちらの存在をわかってくれているのだろうか、という単純な疑問がふと心に湧いてくる。何度もくりかえして彼はわざと身も触れるばかりに、やはり気ままに動きまわっているらしい相手のすぐ身近をかすめてみる。仲のむつまじい二羽の蝶たちみたいにもつれ合って宙を飛ぶことはできたとしても、 しょせん、ひとつに合体できる願望などは不可能だった。死者の霊は感じることはできても、生前の言葉を口にすることはできないのだから、たがいに交信する手段もないときている。

事務的にそう云う絹枝の顔をじっとみつめて、ヨシエは真剣な苦痛で眼に涙さえ浮べて、許しを乞うていた。それは全然食慾がないのに、定量をとらなければならない食事が、彼女にとって最大の苦痛であることを訴えているのだった。絹枝は娘の様子に胸を刺すいたみを覚えて、 思わず顔をわきへむけ、しばらく感情を制した。

眼をさますと、たえず左肩を右手ておさえて訴える。その涙さえ浮べた眼には、苦痛で眼光がうすれ、言外にあふれた哀願が、相手の胸を刺すように迫った。絹枝もうるむ眼をしばたたき、喉もとをしめつけられる思いに息詰るばかりだった。

絹枝の抱き方があまりに強すぎたのて、ヨシエが腕の中でもがくのを見た竜介は、絹枝の肩を叩いて、寝台に寝かせた。 すると、ヨシ工は又、竜介にも一度抱いてくれと云った。 竜介はふたたび抱いてやった。ヨシエは安心したようにしずかに瞼を合せていった。竜介が彼女の鼻先に耳をあてると、 かすかに息を洩らしていた。竜介はヨシエの眼をさまさないように、そっと寝かしつけた。

絹枝は、食器をとり上げて、ごはんをよそっていたが、良人の言葉て思わず内心の虚をつカれ、瞼毛の間に涙のにじむのを覚えた。

それは、被爆して全滅したクラスの学友たちの死とはことなっていた。

尾越の乾燥した椎茸のようにしなびた耳朶の上部が欠けていた。その欠けた部分に、尾越が慣れた手付.て人さし指の先をあてがうと、その空間は訛えたように埋った。 和夫は、自分が蚊帳の中で、と泣き喚いたことを思いだした。バラックの天井や壁の素地が見えなくなるまで、ハエが密集していた。和夫の化膿した傷口を襲っては、爪で引つ搔いた。たまりかねて蚊帳の中に逃げこんだ時の嬉しさがよみがえってきた。

予科兵学校の制服を着た屈強な上級生が、周囲の者に、日焼けした顔を向けるとそう言った。自分でまず、煉瓦塀の塊の端に乒をかけて剝かしはじめた。ーー、三人がア伝った。 はじめに現われたのは、煉瓦の表面に付着した頭髪の朿であった。いくらか茶っぼい髪の毛は、その長さから推察して、 女学生を想像させた。そう思ってまちがいないと思われたのは、その脇に、幅五センチほどの袋縫いの鉢巻があったからである。

人々はこんな挨拶をしていた。

父は七十一歳だった。宿根草である黄葵の花は一季も欠かさず戦後ずっと咲きついだ。それが今年ですでに生涯の半分以上におよぶ永さであることをおもえば、父の戦後とは、執拗て重たい、 はるかな時間である。父は人さし指を右中左こ旋回させてベッドの前半分を起き伏しするハンドル操作を命じた。だが、母にも私にもついに意味不分明な仕草もしきりにやった。片腕を頭上へさしのばし、あきらかに何事かの転換を乞う、大きくしゃくり上げる手首の動き、あれはいったい何だったろう。まだ残っている正気をしぼり集め、父は必死に語ろうとした。語るに口が悖り、われとわが焦立ちつつ、 ついに幾度も幾度も繰返すほかなかった仕草、あれは何か。 どんな転換があすこであり得たのか。

凍えた息を激しく吐きながら体格のいい電気工の弟がいう。 答えようにも私はすでに声が出なかった。ようやく坂を登りきったときは、崖下の一群の墓地に蒼じろく降りくらむ霎を眺めなから三人とも立ちどまってひたすらあえいだ。墓地の向こうの坂に停めたパトカーの赤い灯がみえる。棺て運ぶのではない、違法であるはずの生なましい死体を帯びた一団に、警官たちは何も言ってくる気配がない。だが、じっと動かないことがかえってかれらの凝視を感じさせた。われわれは焦った。苦しみ疲れて行くあいだ、かれらの灯はあたり一面の雨脚を切り払いながら鮮やかに輝いて廻転し続けた。

五階からエレベーターで降りる。昼間なら混み合っている外来の待合室で、椅子だけが整然と暗闇の底に沈んでいた。 母はそのときになってはじめて寒さを口にした。

———」

と、ふと口をついてでた広島訛りが、津崎の心に哀しく残った。

事態は、単なる堕胎といういかがわしいことではなくなってきたのだ。奈智の妊娠は、原爆投下の瞬間からこれまで二十八年間の、あらゆる深刻な恐怖や不安とのつらい戦いの場へ、彼女をあらためてひきずりだしたのであった。 津崎はいまになって、奈智ののろのろした投げやりな動作や、足をひきずって歩く癖が、実は性格的なものではなくて、 原爆症ノイローゼ、あるいは潜伏しているかもしれない原爆症そのもののためてはないか、と知って、痛切な思いにとらわれていた。

それにしても、奈智との関係がほじまった四か月前には、 津崎ほさすがに驚いた。眼がさめてみると、いつのまにか若い男がリビングのソファのうえや、四畳半の押入れの下段に蒲団をひきずりこんで眠っているのだ。

広島にきてはじめて、津崎は明るい気持で感歎の声をあげた。

教師は新井たちの帽章をちらと窺い、顔をそらし、新井たちが歩いてきた一面の埃の原のほうを茫と見やった。新井はこの男は特定の人間、それも不特定多数の人間を待っていたのだと感じた。というのは彼の顔には人間愛にみちた悲哀があったからである。

笹田は新井の右足を取り、注意深く足の衷をしらべた。笹田にはひどく優しいところかある。中学時代からそうだったが、勤労動員でこちらへ来てからその優しさはいっそう目だち始めた。食糧事情が悪化し、労働がきつくなり、みんなが自分を守るのに忙しくなるのに反比例して笹田は優しくなってきた。彼のキリスト教はほんものかもしれぬ。 自分の家が豊かなのを恥じるのは青年期にありがちなことだ。笹田はかって新井にいったことがある。親父がすぐれていて、しかも尊敬できないとき息子はどうしたらいいんだろう?ある日父が祖父の代に小僧だった人に店をあけわたすようにいっているのをおれは耳にした。祖父ほ醬油屋だった。 父は自分に向かない店をしめ、ほかの場所で鉄工所を始めた。 父には古ぼけた醬油屋の店や倉は不要だったはずだ。それをなぜあけ渡せといったのか。その小憎さん、といってもそのときはもう四十になっていたんだが、四十の小父さんは泣いて父に頼んでいた。彼が地味すぎて店が繁昌せず、家賃を少ししか取れないのが父は不満だったのか。それともなにかいさかいがあったのか。とにかく父は彼を追いだしてしまった。 どんな人がはいってくるのかとおれは期待していたが、だれもはいってこなかった。戦争がひどくなってきて父かあてにしていた男が醬油屋を始められなくなったからだ。おれはそれ以来父に敵対しようと身構える心を捨てきれなくなっている。

新井はそれから墓参りをしなければならぬと思った。祖先崇拝の気持からではなかった。自分がそこに葬られるからだった。

父や母や弟の顔がしきりに目に浮かんだ。新井は自分もいよいよ最後だと思った。つねづね肉親に対する愛が薄いことを新井は自覚していたから。:：：

私たちが店の外に出ると、 通りに面したガラス壁の蒼いカ —テンがひき開けられ、 ほおずき色のブランデーグラス型をしたシャンデリアが輝いているのがみえた。なにげなく内部をのぞくと、カウンターに片肘ついた姿勢で女主人がこちらを見ていた。照明とガラスの隔壁のせいで、白い顔の輪廓がぼやけて、疲労のために瞼が大きく二重になり、その奥の眼がきらっと光っていた。しかし、彼女は私を認めたのではな <'虚脱していたのだと思う。

涙さえ浮かべていなかった。だが、燃える街の上空を黒い巨きな鳥のような影が駆け抜けると、後にまたあの叫びが尾をひいた。目覚めると、いつの間にか信子が彼のふとんに入りこんでいて、彼に背中を押しつけたまま眠りこけていた。なるほど背中は冷えきっていた、父の屍体に触ったときのことを想い出してぎくりとしたが、信子の背中は呼吸していた。 すると改めて、生活が弱りきった心の中へどすんと落ちこんできた。

喫茶店は、信子に遺贈されていたのだ。信子はすでに遺書でそのことを知っていたのに、なかなかそれを私たちに打ち明けなかった。いや、結局打ち明けなかったのだ。女主人の死後も相変わらず店が続いていたので、黒崎が現在の所有者のことを訊くと、信子の返答が要領をえなかったものだから、 なんとなく気になっていた。黒崎は私になに気なく訊いたりしたが、むろん私が知っているはずはなかった。私はぼろぼろの辞書と工学辞典を片手に、 黒崎の持ち帰るなんとかプラントの組立法やパキスタンと造船会社のなにかの契約書などを翻訳していただけなのだ。私はこの家の掃除はもとより、 朝夕の雨戸の開閉もしなかった。 逆に黒崎は雨戸の開けたてまて自分でした。夕方、仕事に疲れてぼんやりしていると、目の前の雨戸がガラス戸の向うでふいに音をたてて移動し始めた、さっきまで傍らにいたはずの黒崎が屋外に廻って閉めようとしていたのだ。この家は原子爆弾の爆風でがたがたにされていたから、雨戸も屋内からではびくともせず、仕方なく黒崎は外に廻って開閉していたのだった。閉じられていく雨戸と隠されていく薄暮の空を眺めながら私は奇妙な満足を覚えたものだ。

と黒崎がいった。黒崎はそれまで信子のことを殆んど忘れて、自分の苦しさの中に閉じ籠って暮らしていた。黒崎は不覚にもあえぎながら訊いた。彼はまだ事態がよく分からず、少女が自殺を図ったと勘違いしていたのだ。

平沼は言った。

彼はちらっと私の方を見た。そしてそのすばしっこい目で、 私のもっている包紙にも一瞥をくれた。

私は曖昧に言った。

それからその日当りのよくない施療病棟の病室での死にかけのインディアン二人、同じく死にかけの白人野郎ひとりの三人ぐらしが始まったわけだが、とにかくこのグレンという男、身動きならぬまま、また金がないままにレッキとした白人様なのにインディアンニ人といっしょに寝かされているのが牘にさわってならなかったにちがいない、朝目をさますと、とわめきたてた。ロンのがその彼のセリフにつづいて一日が始まるようになっていたが、そのあともやたらがつづいた。このあいだまで近くの田舎町の牧場で働いているうちにからだぐあいがニッチもサッチも行かなくなってここにかつぎ込まれて来たわしら同様文無しのこの男には、わしらとちがってささくれだった白い肌と赤茶けた髪の毛をもっている人間だということ以外にはわしらにむかっていばるタネは海兵隊しかなかったにちがいない。海兵隊で新兵の訓練係をやっていたときには思いきり今どきのふやけた若者をぶんのめしてやった話、オキナワで陸軍の腰抜け召集兵相手に大たちまわりを演じた話、それから話はもちろんいつだってべトナム野郎のグークを何人ぶち殺したか。とか言ったが。あくまで海兵隊のことをうるさく自慢げに言うので、わしが業を煮やしてわしの甥つ子の左腕一本ベトナムにおいて来たアホウの話をしてやると、グレンはインディアンが海兵隊にいたということ自体を知らなかったのか、それとも知っていても知らぬ顔をきめ込んでいるのか、とたんに何かいやな物でも無理やりに口のなかいっぱいに押し込まれた顔になったが、すぐ態勢を盛り返すようにと言い出した。いや、そう言い出したばかりでない、ベッドの下においた汚ないズックのズダ袋のようなカバンに手を伸ばして長いあいだかかってようやく取り上げると、なかからプリキのオモチャのような勲章を出してみせた。とおらび上げた。

ロンはゆっくり顔のむきを変えて隣りの.ヘッドのグレンの病みほうけた顔に見えない眼をむけた。

これはわしが叫んだ。ふしぎにわしの声もはしゃいで聞こえた。写真で見たことのある白い砂糖菓子のような建物が前方下方に見えて来た。とグレン———サージェント・グレン・ティラーがすすり泣きするようにまのびのした声で叫んだ。もちろん、 ヒッヒッとも笑っている。とロンが注意したが、泣き男、泣き笑い男はとわめきたてつづけた。白い砂糖菓子のまえに眼にあざやかに芝生のミドリがひろがる。二本のポ

これ以上、たとえばというような決り文句について、あらためて検討する必要もないでしょう。いったんそれが公然と復活しはじめれば、 からまでは、まさに急坂を走りくだる勢いでつながるにちがいありません。それは太平洋戦争の悲惨に向けてわれわれが経験し、まだ忘れてはいないはずの歴史であります。

このようにしていったん神という言葉までを引き出してしまえば、いわゆる自由主義国家を守るという から、が吹いてを勝利にみちびくはずのという言葉までが、ひとつながりのものとして思い出されます。太平洋戦争の敗北にあたって、われわれは したのでしたが、しかしの たるゆえんをなしていた絶対天皇制については、それを根底から洗いなおす思考、実践はなされませんでした。そうである以上、核シェルターの壁にがかかげられ、その前での死をとげることこそに生きることだと誓いあう、明日の日本人家族について予想することは難かしくありません。そのようなもうひとつの日本人論が、ごく近い未来にかけて、いかにも現実的なものとして広く見られることになるのではないかと僕は考えます。すでにという言葉は復活していると新聞はったえていますし、僕自身そのように罵倒してくる匿名の通信に無縁ではないのであります。

フランス・ユマニスムの専門家であった故渡辺一夫がしばしば引用したものに、セナンクールの次の言葉がありました。《人間は滅び得るものだ。そうかもしれない。しかし抵抗しながら滅びようではないか?そしてもし虚無が我々のために保留されてあるとしてもそれが正しいことてあるというようなことにはならないことにしよう。))この言葉にこれまで支えられてきたとおりに、 僕はいまも励ましを見出します。しかしあらためて核兵器に覆われたわれわれの地球を考えしかも国際関係の進み行きが、核廃絶の方向にあるどころか、すくなくとも核軍縮の方向にあるどころか、 さらに新種の核兵器を積みかさねる勢いにあるのを認める時、どうか?人間は滅び得るものだという言葉が、文字どおり人類の絶滅を意味すると受けとめざるをえぬ今、僕はひそかに、抵抗しながら滅びることがなんになろう?虚無の不正を主張しつづけて、その虚無にとびこむことがなんになろう?と、徹底した無力感におちいりもするのであります。 しかし僕のように.ヘシミズムにおかされやすい性向の作家に対して、やはり今日の国際関係を視野にいれつつ仕事をしながら、核状況に関するかぎりは、不思議なオプティミズムを示す作家もいます。もっともそのオプティミズムの内容を検討してみれば、それが奇怪な歪みを示すものであることも明瞭になるはずですが。しかも当の作家が、無知あるいは無邪気だというのではなく、防衛庁関係者のレクチュアを聞くこともかさねた模様であり、あらわすぎるほどの政治的な意図もこめて書いた小説に、そのオプティミズムがあらわれるのであります。作家とはいいましたが、いまや自民党タカ派の国会議員としての活動が主力である石原慎太郎の、『亡国』

しかし同時に、レーガン米大統領が中性子爆弾の生産を再開し、かつMXミサイルの実戦化を推進し、核弾頭装備の空中発射巡航ミサイルを、また潜水艦発射巡航ミサイルを実戦配備し、そして戦域核ミサイルの欧州配備をつらぬく決意だという新聞報道に接すると、あらためて大きい無力感へと後戻りしもします。レーガン米大統領は、今後二十年にわたっての米ソ間の核軍事力のバランスを考え、自国の核軍備の強化に着手したというのですが、これと見あうソヴィエトの核強化を考えれば、そのようにも厖大な核兵器に覆われた世界が、爆発してす.へての生物に死をもたらすこともなく、三十年間も存在しつづけると考える点において、この米大統領とその側近たちが、もっともオプティミスティックな連中ではないかと嘆息されるからです。われわれはこのような政治家たちに、ヴォネガットの言葉にならえば、われわれの地球の運命をたくしているのであります。

両方とも血液の癌だと云われ、生命の助かる治療は現在はありません。自分のからだの血が再生されず(いま流れている血液は二週間で新しい血と入れ替る。私は何も知らないまま『屍の街』において、 八月二十日ごろから人間がるいるいと死んで行ったと事実のみを書いたが、 いまになって、 科学的に実証された)もとの血液が一滴のこらず消費されたとき、 死なねばならないのです。もっとも一昨年広島へ行った時、 母をつれて日赤病院へ行き、 白血球と赤血球の検査をしてもらったのですが、 広島の日赤病院では、原爆の日に広島にいた者である限り、どんな病気でそこへ行っても、 カルテの肩に、と書いた紫インクのスタンプをべったりと押すのです。青野季吉のような人までが、 作品月評の席上、 と云つておられます。

こんど私がまた暫く病気していることについて、病名にたいする誤解がひどいし、そのことは個人的な問題ではないので、一応書けるだけ書いておきたいと思うのです。広島の 、そのほか、緑の会やいずみ会の会員たちがいっしょになって、広島文化サークル・センターというのを作っています。その同人たちが小さな機関紙をこしらえ、 その紙上で、私が になったということを、報告しているのです。しかし私は定型的なでなく、この思い違いは一般的のようだから、 一度はそのことを書いておきたいと思うのです。私は一度として自分がだと書いたことも云ったこともないのですが、私が病気をすると医者以外の人で原爆症だということを云っているのに出会わし、こちらがハラハラし、ちよっと待ってくださいと云いたくなるのです。 そしてその集いの十三人の人たちが、 私をなぐさめ、私を勇気づけるためと云って、 寄せ書きを書いて来ました。全部はあげられませんが、思い思いの便箋や原稿用紙に、次のように書いています。

私ととについていま私は伊豆の下田に来ています。一月中旬から来て、冬を越しました。伊豆の南端で、木ちん宿に毛の生えたような安宿とは云え、とにかく宿屋ぐらしに明け暮れているということは、普通の場合のんびりした話しにちがいありません。 しかし南伊豆の小さな港町には、ほとんど毎日荒々しい西風がふきつのっています。雨もよく降ります。雨の次の日は、判でおしたように、つよい西風がふきまくるのです。不漁のために、ゴム長をはいた魚くさい漁師たちが、大ぜい町中をうろついています。

爆風のあふりをくって失神したくらいのことであったらと私は思います。ー九四五年の八月六日の朝のみでなく、その後もながく、広島市の空気、水、野菜、豚などに、 放射能があったということを、一昨年の『中国新聞』(広島)が都築正男博士を招いて、明確にしています。

その日は小春日和であった。屍体発掘にはふさわしくないのどかな朝であった。

三日目、前日の屍体が再び裸にされているのを見た。一夫も、ひざまずき、手をあわせた。その日の、ズボンとモンペの男と女の死者に対し、帰りに父はふたたび手をあわし、なむあみだぶっを繰返した。

母が息をひきとった後に、父は戻ってきた。母はその死を予想しながら、父に報すことをゆるさなかった。母は死ぬまで意識がはっきりしていた。原爆症が母を殺した。肝臓と子宮と、そして皮膚までガンにおかされて、瘦せ衰えて死んだ。 翌早朝、父は夜行ちどりで広島に着いた。 顔から白布をとりのけて、父はまばたきもせず見詰めた。 ことばもなく、泪も出さず、母のうちに入りこむように見詰めっづけた。三木のほうがやりきれない思いであり、その父を見、母を見、父のこころの裡を思い、胸が締めつけられ、 父への悼みが新たに重く三木を捉えた。

——今日も私の知人たちは県民大会に出かけてゆきました。そんなとき羨望を感じるのです。そして苛立たしい気持が走ります。

このYさんの手紙からニカ月経った八月はじめに、やはり Yさんから今度はKさんの入院を知らせてきた。七月から入院していると病状の経過を書いた手紙は、あわただしく乱れていて、кさんの病気の重さと、Yさんの心痛の揺れを伝えていた。そして私が返事を書く間もなくつづけて亡くなった電報であった。かんたんに云えば、全くかんたんに云えば、 кさんの病気は肝臓癌であった。

私はやがて盥から出ると、屋根の上にそうっと湯を流す。 一度に流すと、樋にあふれて、湯は、裏の二階の窓に飛び込むからなのである。湯浴みの間もすぐそばの部屋で雑談しながら、кさんたちが私を待っている。私はその気配にもこの人たちの友情と配慮の厚さを感じた。кさんたちの配慮よ、 この物千台の急造の湯浴み場だけではなかった。 Yさんからそう聞いて、私は信じがたいほどであった。 кさんはなにげなく答えた。 そう云うと、

私は、私の探すKさんの画を、数年前に一度、この展覧会で見たことがある。十数年以前からいつもこの展覧会に出品していたкさんの画を、会場では一度しか見なかったということは、私のкさんに抱く友情から云えば、怠慢にすぎることだった。Kさんもまた自分の画を出品したときも、その画に添ってその度に上京するというわけではなかった。今おもえば、それは旅費に差支えてのことというわけであったろうか。だから数年前にこの会場にKさんの画を見にきたとき、 それを見ないKさんに私は、会場での感じを手紙で知らせた。そのときこの会場に二枚出品されていたKさんの画は、 柔らかな、ピンクを基調にした、品のよい感覚の風景であった。この人の性格の優しさと一種の気むずかしさとがよく表われていて、その優しい美はどこかで締まって、きりっとしていた。Kさんの性格と風貌そのままの感じであった。Kさんの風貌はどちらかといえば鼻筋のとおった眉の濃い男らしいものだったけれど、当時胸を病んでいて、その視線は光りをおびて澄みながら、どこか一抹の気むずかしさをただよわせてもいた。彼が共産党のビラを書くのを想像すると、それはどんなビラであるのか私には見当がつかなかった。しかしあのときのKさんの画は美しい色彩を持っていた。 今日の私はKさんの遺作となった出品画を見にきている。 Kさんの実弟であるIさんが、Kさんの遺作をたずさえて長崎から上京したのは、数日前であった。Yさんが一緒に上京したのは、これが最後となるкさんの出品画を、そのかざられる場所で見とどけたいということであった。YさんはIさんの義姉に当るが、YさんがKさんの夫人というわけではない。Yさんは独身のひとである。Yさんの妹がIさんと結婚して義姉弟の関係になる。だからкさんとも義兄妹になるわけなのだが、YさんはKさんたちと姻戚関係になる以前から、Kさんの最も親しい友人であり、その仕事の支持者であった。同時に、華僑として長崎に住むYさんにとって、KさんはYさんの心の支えともなる人であったにちがいない。私はKさんとYさんの交りぶりをいくらか知っている。Kさんの逝去してまだニカ月と経たぬこのとき、遺作二点をたずさえて上京したYさんとIさんの、この出品画によせる気持は切実なものであった。

と監視人は苦笑した。 ハナは若者の槍先の落した、真紅の大輪の造花を髪に挿し直した。 スズキは恥ずかしそうに、つぶやいた。

スズキは、息苦しかった。新種の動物たちは、彼の前に、 重々しく充実したを披瀝していた。盲目的な、しかし生き生きとしたである。それはヒタヒタと押し寄せ、彼を狼狽させた。と、ハナが話しかける。その低い声は、聖なる音楽会の緊張を破る、不敬の声

永久館の内部が壮大な観ものであることは、スズキもかねがね聴き知っていた。海岸にそびえ立つその巨大な建築は、 軍事省大臣みずからの設計で、つい一年ばかり前に完成したものである。厚い灰色の壁にとりかこまれた円型の永久館は、遠くからは堅固な城塞とも見え、ぶきみな牢獄とも見えた。秘密の工場らしくもあり、またはギリシャ・ローマの市民競技場か、何か特別の聖なる神殿をも想わせた。今までのどんな建築物にもあたえられなかった奇妙な内容を蔵したこの円型の怪物は、遠くつらなる海の面がはげしい風で泡だち、重くるしい灰色にかわった空の下でうねる日などには、 特に神秘的な風貌を増した。

緋、赤、紫、黄に黒のだんだら、そして消え残った煙の白。火災の各過程をそれぞれ色彩で示す消防自動車が、何台もと通り過ぎた。白い指の群が、番な消防自動車の上で、クルクルと輪を描き、自由自在な白い線を走らせて、彼等の祭典の場所へ、楽しげに急行する。 憲兵の白色オートバイが二台、スズキの車に横づけにされた。オートバイに取り着けられた、電波探知用のアンテナが、甲虫の鬚のように光りながらしなった。 監視人に注意される前に、スズキは本能的に、アルミ製のパスを胸ポケットから取り出していた。渡された万能パスを掌にすると、憲兵はカチリと靴の踵を合せて、一度した挙手の敬礼を、もう一度やりなおした。普通の市民の体格の一倍半はある大男の憲兵は、スズキの守札で、 二人ともかしこまった。だが憲兵の驚きを、彼等の顔面に認めるわけにはいかなかった。何故ならば、二人とも異様な仮面を着けていたからである。

今朝もまた説教場の木魚が鳴り出した。

稲妻が閃いている。

土曜日だもの。もうじきおじちゃまのパブリカのクラクションが鳴るだろう。兄弟が駆けてゆく。パパ、オカエリナサイ。二人は、デザートのお菓子の包みを提げ、自動車の鍵を鳴らしながら帰ってくるおじちゃまの、洋服の端を引張る。 鍵に触る。阿紀にはそれが目に見えるようだった。兄弟の駆け上った部屋の窓硝子に、押し花のような六つの掌が開いた。

山に近いお庭の松に鉄を使っている時、誤って高い脚榻から石組の上に落ちた父が、打ちどころが悪くてそのまま亡くなったあと、小さかったわたしを連れて母がお邸のご厄介になった頃の奥さんは、母と同じようにまだお若かったのを今でもよう憶えています。いくら材木で古くからのお店を張っていられたとはいっても、庭木の手入をしていての事故だからと、わたしらの生活を一時助けて下さった村川の旦那さんと奥さんのご恩を忘れたら、そりや鬼じゃと、よく母に言われて育ちました。お耳が少し遠いので、時折見当違いの腹立ちをされるのには困ったけど、まこと、耳の遠い者に悪人はおらんと言う通り、奥さんはお人がようて、噓つきにはこわいお人じゃが、それで損をされることがあるとも聞かされました。東京に来られてからの大病は、どんなにおさびしかったでしょう……

天保銭大のゴム印が、あの青年のカルテにも押されていた。 赤い、スタンプインク!。白いカルテの右上部に押され步たそれが健作の眼を射た。彼のカルテの第一頁にも、それと同じ判が押されている。

顯顓を押え、横向きの姿勢で転がったまま健作もロを添えた。

注射のあとを揉みながら、

と曽根。 答えながら顔が歪んでいるだろうな、と彼は思った。銀蠅は無数に増え、不定形にふくれ、しぼみ、流動する。黄、赤、 紫、みどりなどの、めくるめくような明滅。耳鳴りも始まつた、耳底かピーツ、 ピーツと間断なく鳴り始めると、頭蓋骨がひびわれるような痛みがくる。